

## 何其芳「墓」に見る夢想世界の展開

——〈王子〉から〈釋迦〉へ——

高 屋 亞 希

## 一 はじめに

一九三一年から三三年にかけて、一連の戀愛敘情詩を書いた何其芳は、早くも翌三三年に詩作上の危機を迎えている。ここで言う危機とは、とりあえず詩の數量が急激に減少し、三三年秋以降まで著作年譜に空白が生じていることを指す。<sup>1)</sup>もとより、作品數の減少から詩作の行き詰まりを推論することは結果論に過ぎず、必ずしも詩作の危機を意味するものではないだろう。しかし何其芳自身、後に詩集『預言』を編んだ際に、三三年を分水嶺にして、自作を第一輯と第二輯に分けていることは、この詩作の空白と何らかの關連性があるのではないだろうか。先行研究に於いても、第一輯と第二輯に

所收された詩の間に、内容上かなり相違が見られることについては、つとに意識されてきた。先行研究を要約するならば、第一輯の中心をなす個人的な戀愛世界が影を潛め、替わって第二輯では現實社會への關心の萌芽が認められる、というように書き手である何其芳の、興味對象の變化として、概ね解釋されている。だがこの内容上の相違を、單に書き手の興味對象の變化によるものと見做すならば、三三年の詩作の空白を問題の視野に置くことができない。

本稿では、三三年に執筆された散文「墓」を中心に分析することによって、三三年に見られる何其芳の詩作上の空白が、それまでの戀愛敘情詩で行った言語實踐の展開上、必然的にもたらされた、詩作の行き詰まりであったことを論じよ

何其芳「墓」に見る夢想世界の展開（高屋）

うと思う。分析対象として「墓」を取り上げる理由は二つある。第一に「墓」が、本稿が問題にする三三年に書かれていること。第二に戀愛を主題としているため、同じく戀愛を主題にする三三年以前の詩との差異が、單に題材の變化としてではなく、戀愛を言語的に構成する形式上の變化として論じる視點が得られることである。

## 二 異郷で綴る夢想世界

「墓」の構成は、これまで異郷にいた雪麟という男が、故郷の農村に戻り、農家の娘である鈴鈴という女に出会い戀をする、という單純なものである。先ず雪麟が、異郷からどのような背景を持って、この故郷に現れるのか、確認しておきたい。

花の香りと緑の陰が織り成す春の夜に、かつて夢の中で紅く熟れた葡萄のような、初めての甘い口づけを摘み取った者がいるだろうか？かつて若い女に化した燕が夢に入ってきて、燕の羽の色をした衣服を着ているのを、夢見た者がいるだろうか？かつて一面識もない戀人が、遠くに嫁ぐ前夜に別れを告げに来るのを、夢見た者がいるだろうか？（中略）雪麟が外の世界から持ち歸ったの

は、ただ些かの夢、些かの飲み干して空になった酒瓶のような夢だけであった。久しく別れていた故郷は、まだ開けていない一瓶の新しい酒を、彼に與えなくてはならなくなっていた。（五〇六頁）

散文「墓」への雪麟の參入は、非常に唐突である。「墓」は雪麟と鈴鈴との戀愛を主題にしているにも拘わらず、専ら鈴鈴の容姿や性格についてののみが、散文の話者の描寫對象になつてゐる。更に三章で後述するように、戀愛に對する鈴鈴の關わり方が明確に提示されているのに比して、雪麟の戀愛との關わり方について、話者は明示していない。つまり話者は、登場人物の雪麟と共犯關係を結び、雪麟が讀み手の眼差しに對象化されることを、拒絶しているのである。

この場面についても、異郷で雪麟が何について夢想していたのか、判然としない。しかし「墓」全體の構成から考えると、故郷が雪麟に與えたのは鈴鈴との戀愛である。従つてこゝでの夢想とは、戀愛に關するものだと推測される。つまり戀愛に關して、過去に異郷で見ていた夢想が失効し、雪麟はその代替物を求めて、この故郷に現れたことになるだろう。それでは雪麟が異郷で見ていた戀愛の夢想とは、どのようなものなのだろうか。

ここでは三つの夢想が擧げられているが、その全てについて、讀み手に文脈が與えられていないため、内容は不分明である。最初のものについて、甘い口づけや若い女を夢想するのは、戀愛への憧憬として理解できるにせよ、なぜその夢に現れる女は燕が化したものなのか、不可解と言えよう。また戀人に一面識もないという修飾語が付いていることも、語義矛盾をきたしているように見える。先ず後者、一面識のない女が別離を告げに来る夢想について検討してみる。<sup>(2)</sup>

女が自分に別れを告げて別の男に嫁ぐという設定は、もしこの女と雪麟との間に戀愛關係を想定するならば、雪麟は女にふられた形になるだろう。しかしここで女は、一面識もないことになっている。と言うことは、現實世界での具體的な行爲としては、二人の間には戀愛關係が成立していなかったことになる。にも拘わらず、戀愛關係が発生していると言うのは、別れを告げに来たこの時に、初めて女の側から愛の告白がなされた、と假定するしかない。つまり女は内心ずつと雪麟を愛していたのだが、恐らくは強制的に、他の男と結婚することになったのだろう。結婚という時に及び、初めて女はこれまでの胸の内を告白し、現實には愛していない別の男との結婚に赴いた、という狀況が雪麟に夢想されているこ

とになる。現實世界ではこの女という戀愛對象の不在、或いは喪失として語る他ないが、雪麟の夢想世界では、潜在的な純愛の可能態が保持されていた、と考えられる。

雪麟は何故、このような夢想をする必要があったのだろうか。この問いに對する答えを推測するのは、さほど難しいことではない。散文の末尾近くで、戀人となった鈴鈴が、雪麟に異郷での戀人の有無を尋ねると、雪麟は「愛したことはあった。(中略)しかし誰も僕を愛してはくれなかった。僕はただ心の内で密かに愛してただけだった。」(九頁)と答え、戀人がいなかった孤獨な現實の姿を、自ら明かしているからである。女が何處からか自分に愛を寄せていると夢想することで、戀愛對象の不在という現實世界が突き付ける精神的な苦痛は、基本的に解消されていたことになるだろう。<sup>(3)</sup>

だが現實世界の緩衝劑となっているこの夢想が、讀み手に不分明な表現でしか提示されておらず、ついに雪麟、或いは散文の話者によつて對象化されていないのは、注意しておく必要があるだろう。何故なら、この雪麟の夢想の曖昧さは、戀愛の喪失を言語的に形象化するにあたって、書き手である何其芳が直面した行き詰まりの原因と同根だ、と考えられるからである。つまり雪麟の夢想世界内部に即して、戀愛對象

の不在を語ろうとしても、この夢想によって、雪麟が現實世界での自身の孤獨な姿と、直接向き合う方向が回避され、自己、或いは喪失そのものが、言語的に對象化されることがないのである。その上、雪麟自身は夢想世界内部の登場人物であるため、不在の戀愛對象が何處からか自分に愛を寄せるといふ夢想そのものを、物語として對象化していく方向も閉ざされているのである。このように雪麟に即した話者が、夢想世界の内部に止まる限り、戀愛對象の不在を言語として語ろうとする試みは、読み手にとっては曖昧な表現に止まるほかない。雪麟が異郷で見た夢想は、言語的な行き詰まりによって失効した、と推測される。

こうした言語實踐の行き詰まりをもたらす原因は、三三三年以前に書かれた何其芳の詩に於いても認められる。戀愛對象の喪失が具體的に言及されているものとしては、例えば「初めに僕の寂しい涙を伺いみて／優しく穏やかな手で僕のために拭ってくれたのは誰なのだろうか／僕の十九歳の誇り高い心を盗み去って／少しも思いやることなく捨てたのは誰なのだろうか」（「雨天」より、三三年八月）、「僕はかつて君のひと夏を飾っていたことがある薄絹の肌着／今は柔らかく疊まれて、秘められた恨みを折り込んで」（中略）／永遠に君の甘

い聲が嘘だったとは信じない」（「羅衫」、三三年九月）というような詩句が見られる。この詩句からは、喪失をもたらした契機が相手の女の側にあり、自分を精神的苦痛を被た側として、話者が認識していることが伺える。だが「嘘だったとは信じない」という詩句が端的に示すように、戀愛對象が自分を捨てたことを責めたり、或いは捨てられたという事實や自分の姿を凝視する方向には行かず、その對象が自分の元を立ち去ったことに、何か外在的な事情が介在しているのではと推測して、夢想世界へ赴く契機が見られる。恐らくは、このように戀愛對象が自分を捨てた外在的な事情を推測する過程で、自分に潜在的な愛を寄せる女が、別の男との結婚を迫られて別離がもたらされる、という夢想が派生するのだろう。但し詩に於いては、この外在的な事情がどのようなものなのか、必ずしも具體的に表現されていない。つまり「墓」での雪麟による夢想と同様、一連の戀愛對象の喪失を扱った詩に於いても、孤獨な自己像や夢想世界そのものは、對象化されていないことになるだろう。

さて「墓」の分析に戻ると、このように女から密かに想いを寄せられるという夢想自體は、雪麟の歸郷の後も廢棄されたわけではない。と言うのも、雪麟は鈴鈴にアンデルセンの

《人魚姫》を話して聞かせ、物語に感動した鈴鈴が、雪麟の胸に身を埋める場面があるからである。物語を聞かせるという行爲が、雪麟にとって女と物語世界を共有しようとする、戀愛への欲望を伴うと假定するならば、ここでもまた、心の内で男に愛を寄せる女という物語が反復されていることになる。人魚姫の犠牲的な愛が夢想される基底には、現實世界では誰にも愛されず「ただ心の内で愛する」しかない、孤獨な王子の姿が括弧に括られていたことが推察される。ここでも雪麟にとっては、王子の姿は言語的に對象化すべきものではなく、自らを夢想世界に登場する王子として夢想していることになる。夢想世界に登場する主體になることと、夢想という行爲を行う主體が分離していない、雪麟という曖昧な言語形象は、三三年以前の詩の形象と、基本的に同じものと言つてよいだろう。

孤獨な王子という物語の登場人物を想定するならば、燕が化した女が自分の夢の中に入ってくるという夢想についても、その來源を想像するのは難しくない。來源は恐らく、ワイルドの《幸福な王子》であろう。王子を一人置いて南方に去るに忍びず、黙々と王子の耳目となって飛び回り、終には北方の冬の町で凍え死んだ燕の物語は、貧しい人々に自身の

持ち物を全て與え、無一物になった王子の精神を超俗的な幸福へと價値付ける、ワイルドの小説全體から見れば、傍系に過ぎない。しかし例えば、何其芳の戯曲「夏夜」(三三年)に於いて、男が女に物語を聞かせる、物語世界共有への戀愛の欲望が表出する場面で、ワイルドのこの小説名が言及されることが示すように、寧ろ王子に想いを寄せる燕という傍系的な物語の方が、何其芳による言語世界に於いては、意識されているように思われる<sup>(4)</sup>。

異郷での雪麟は、密かに女に愛されてはいるが、現實には孤獨な王子として、自身を夢想世界の内部に置き、戀愛對象不在の現實世界に對處していたのである。そして、《人魚姫》の物語への傾倒から見ても、雪麟は歸郷後も、夢想世界の内部に止まることを選擇したことが想像される。それでは、雪麟によって夢想が保持されるのだとしたら、夢想世界内部、ひいては三三年以前の詩が抱える言語的な行き詰まりは、どのような形式によって打開されるのだろうか。

### 三 故郷で綴る夢想世界

「墓」は鈴鈴の墓碑の描寫から始まる。話者は「ここに眠っているのは一個の美しい魂。ここに眠っているのは一人の

農家の娘と、彼女の十六年の静かな歲月（二頁）と、生前の鈴鈴について書き出している。鈴鈴に關する設定中で重要な點は、彼女が兩親の他は友人と呼べる存在が傍らにおらず、専ら小さな虫や草木を友にした「寂しい樂しみ」（三頁）のうちに成長したことである。このことは「墓」の構成上、特に意味を持つものではない。ただ後に、雪麟との戀愛が成立した時點から振り返ると、鈴鈴が異性關係を巡って純粹無垢であつた、という屬性が付與されていることに氣付かされる。つまり雪麟は、鈴鈴との戀愛に於いて先行者を意識する必要が、全くなかつたということである。

純粹無垢という設定は、現實での戀愛體驗の有無に止まらない。鈴鈴は自分が戀愛に對して期待や關心を抱くことについても、禁止されているのである。より正確に言うると、鈴鈴は自分が期待する對象が戀愛關係である、ということすら意識しておらず、雪麟と出會つた時に事後的に期待の對象が名付けられる、という設定になっている。敘述では次のように記述されている。「彼女は何かを期待していた。彼女には一つの秘密の願ひがあつた。その願ひは彼女自身にとつても秘密だつた」（三頁）。鈴鈴は期待する主體にはなり得るものの、具體的對象に期待する主體にはなれないのである。期待する

何其芳「墓」に見る夢想世界の展開（高屋）

對象が何なのか、鈴鈴は明瞭に意識していないにも拘わらず、この期待のために彼女は想ひ寢れてゆく。鈴鈴が期待に身を焦がすようになったのが、十六歳の春、即ち彼女が死んだ年と明記されている。そしてその年の秋、鈴鈴について次のような敘述が現れる。

彼女が期待していたものが、ついに訪れた。その偉大な力が、その暗黒の手が彼女の目の前を遮り、冷たい呼吸が彼女の心を突き抜けた。その聲なき靈の言葉が、彼女に安らかに眠るよう言い付けた。「あなたじゃない。私が期待していたのは、あなたじゃないわ。」と、彼女は心の内では分かつていた。しかし言葉にはならなかつた。（四、五頁）

彼女を訪れた「偉大な力」とは何なのか、具體的には示されていない。しかしこの直前に、鈴鈴が憔悴して瘦せていく様が語られていること、更には靈が彼女に命令する言葉が「安らかに眠れ」というものであることから、鈴鈴の死が暗示されているものと推測される。鈴鈴は漠然とした期待感に憔悴し、戀愛關係を持たずに純粹無垢のまま、十六歳で夭折したことになるだろう。雪麟が鈴鈴の元を訪れるのは、彼女の死後である。「鈴鈴が期待していたものが、ついに訪れた」

(五頁)と雪麟の訪れが書かれていることから、鈴鈴の漠然とした期待はこの時に初めて、名付けられた対象を得たことになる。しかし鈴鈴が既に死んでいる以上、名付けを與えたのは誰なのだろうか。

漠然とした期待は雪麟の側にもあった。何故なら第二章で検討したように、雪麟は異郷で見てきた戀愛の夢想が失効し、新たな戀愛についての夢想を求めて、この故郷に現れたことになっているからである。そうした雪麟の漠然とした期待に、名付けが行われる場面を確認しておこう。

雪麟は鈴鈴の小さな墓碑を見て、碑の上の名前を讀んだ。そして初めて出會い、すぐさま互いに好意を抱いた男女のように、優しさのこもった「また會おうね」という言葉をかけてから、ようやく別れた。その後、彼の影は日毎、この黄昏の内をさまよっていた。(六頁)

と言うことは、雪麟は生身の對話的存在としての鈴鈴に戀したのでなく、墓碑名、即ち記號としての鈴鈴に戀したことになるだろう。記號に戀した雪麟は、「次第次第にこの女の身の上、それに彼女の氣性や好みを推測」(六頁)する。そして推測で織り上げた鈴鈴の像に對して、鈴鈴の友人達が雪麟に間違いや遺漏を教えてくれる。一人の少女に戀して、直接

告白することも出来ないまま、その少女について想像を巡らしたり、彼女の友人から個人的な情報入手するというのは、よくある話と言えるかも知れない。しかし鈴鈴は雪麟とは一面識もない死者であった上に、彼女の友人というのが小さな虫や草木の類であることを想起するならば、この雪麟の推測は現實には何の根據を持たないまま、自己完結した夢想に止まっていたことになるだろう。

注意しておくべき點は、話者による「墓」冒頭部分の鈴鈴の描寫に於いても、彼女には虫や草木以外に友人と呼べるものがなく純粹無垢だと書かれていることである。つまり話者による描寫と雪麟による夢想は、基本的に一致しているのである。話者が提供する鈴鈴の情報も、どこまで現實の鈴鈴の姿を傳えていたのか疑問であり、話者が雪麟の夢想を豫めなぞっていたことが露呈している。だとすると、鈴鈴が友人もない寂しい暮らしをして、しかも戀愛を漠然と期待し、且つ具體的な戀愛對象を持たないという散文の設定そのものも、雪麟による自分に都合のよい夢想だと言えるだろう。結局、鈴鈴が漠然と期待していた對象を名付けたのは雪麟自身だということになり、どこまでも雪麟の期待の裏返しでしかない。この夢想は基本的に、「預言」第一輯の夢想世界と同一

形式ということになる。しかしそうであるならば、三三年以前の詩作の行き詰まりが、解消されることはあり得ない。「墓」は何か別の仕掛けを用意しているのだろうか。

#### 四 夢想世界の對象化

散文「墓」の末尾には、話者が雪麟の夢想世界を對象化していることが、明瞭に示されている。

原野は寂寥に覆われ、夕日が一本の残忍な筆のように、溪流のほとりで雪麟の影が孤獨に瘦せて長く〔伸びているのを〕を描き出していた。彼は獨り言を口にし、微笑んでいた。彼は憔悴してはいたが、夢を見ているかのような瞳は、却って異様な光を、幸福な光を、満足気な光を發していた。あたかも *paradise* から發せられたような光を。(二〇頁)

これまで雪麟の夢想世界に即して敘述を進めてきた話者は、ここに至って「獨り言」を口走る狂人の様相を呈した、雪麟の現實世界での姿の描寫に轉じている。つまり鈴鈴との戀愛が全て雪麟の夢想世界に過ぎないことを、話者が明かしているのである。こうした夢想する身體の對象化こそが、三三年以前の戀愛詩に加えた、唯一の形式的變更だと言えら

何其芳「墓」に見る夢想世界の展開(高屋)

らう。<sup>(5)</sup>但し、夢想世界に没入し「獨り言」を呟く雪麟に對して、話者が肯定的なのか、それとも否定的なのか、「墓」一篇だけでは判断がつかない。

三三年以降に書かれた他の散文に於いても、現實世界での孤獨な生活に耐えかねて、思わず「獨り言」を口走ってしまふ男の形象は、繰り返し現れている。例えば散文「獨語」(三四年三月)もその一つである。「人は孤獨で寂しい時、しばしば奇異な言葉を發したり、或いは動作をする。動作もまさしく言葉の一種である」(二〇頁)と主題を明示した散文の話者は、一人占いをして自己の運命を決定しようとする男の動作に言及する。そしてその「獨り言」的な動作に對して、「その寂しくさつと振る手〔の動作〕は、あなたを感動させるだろうか?あなたには分かるだろうか?」(二〇頁)と、問いかけの體裁をとつた價值判断を下している。恐らくここには、自分にはその「獨り言」という行爲が理解でき、感動を覺える、という話者の言外のニュアンスが込められているのだろう。話者の關心がその「獨り言」の内容ではなく、寧ろ「獨り言」をする行爲にあることは興味深い。と言うのも、「獨り言」の内容は、他人には了解不能な夢想世界であるが、「獨り言」という行爲の方は、現實世界の寂しさのあまりに



無意識に現れたものとして、他者にも了解可能なことだと述べていることになるからである。無論、「獨り言」は必ずしも寂しさ故に發せられるわけではないため、話者のこうした見解は恣意的なものと言わざるを得ない。取り敢えず、行爲としての「獨り言」への話者の關心には、寂しさへの共感が基底にあることを、確認しておけばよいだろう。「墓」の末尾に於いて、話者が狂人のような雪麟に向ける視線には、雪麟の寂しさへの、話者の個人的な共感を想定してもよいだろう。書き手の「獨り言」に對する關心は、何も雪麟という個別的な人物に止まらない。「獨語」の話者は更に、「獨り言」に對する自己の見解を、一般論へと展開している。

高きに登り、悲憤慷慨してひとしきり號泣しない者がいるだろうか。「この時、その人は」彼の「泣き」聲で、宇宙の空虚を満たすことを考えているのだろうか。「なぜ泣いているのか」と問いただされるのを待つまでの時、または「誰も問いかける者もなく」黙って首を垂れるしかないのではと恐れるのだ。(中略)或いは黄昏の燈火の下、前に置いてあるのは、一冊の優れた書物。「書物の」内にそれぞれの「登場」人物が獨り言を、優しく穩やかな獨り言を、また悲哀を帯びた獨り言を、或い

は凶暴な獨り言を呟くのを耳にするだろう。黒い門が堅く閉まつている。一個の永遠に期待した魂が、門の内側で死んでおり、一個の永遠に捜し求めていた魂が、門の外側で死んでいる。一個の魂はそれぞれ一個の世界で、窓を持たない。しかし愛しい魂は皆、屈強な獨り言を呟く者である。(二〇～二二頁)

大聲で泣くという行爲によつても、應答が得られない世界が語られている。泣きながら、問いただされるのを待つ男という形象自體は、自分に愛を告白してくれる潜在的な戀人を待つ男の形象の同型反復と言つてよい。しかし同時に、ここには應答が得られず、泣き聲が結果的に「獨り言」になつてしまふ狀況が對象化されている。且つ「愛しい魂」という形容から伺えるように、孤獨に耐えながら「獨り言」を續ける者を、積極的に肯定していく價值判斷が、話者によつて新たに示されている。要約すれば、全ての存在は潜在的な相手からの應答を期待しながらも、ついに對話を交わす「窓」を持たず、「獨り言」のうちに死んでいくものだ、と話者は人生一般の議論へと展開させている。三三年以前の詩が、孤獨な寂しさを緩衝するために、自分を夢想世界の登場人物、王子に準えることで成立していたとするならば、三三年以降の散

文では、他者にとっては「獨り言」でしかない夢想世界を口走る、物語中の登場人物を對象化して、この孤獨な姿こそが現實世界である、と超越的に語ることで成立している。従って、これまで登場人物の夢想世界内部にいた話者は、寂しいと感じる現實世界の身體と、それを對象化する意識とを、明確に分離することによって、夢想世界外部から語り始める形式を、獲得したことになるだろう。

## 五 夢想世界への回歸

だがこの現實認識は、又すぐさま夢想世界に取り込まれる。夢想世界を對象化した筈の話者は、魂同士が互いに交流せず、「獨り言」に終始しているという現實認識を、積極的に夢想し始めるのである。散文「獨語」の中で、話者は自身を死者の靈魂に準え、かつて自己の身體が占めていた現世を超越的に俯瞰することを夢想している。そして現世の友人達が、死者となった自分のことに全く關心を寄せていない様子を慨嘆し、人間相互の疎隔が逃れ難い所與のものだと語る。友人達の關心の對象になっていないのは、文中で見える限り、死んで忘却された話者自身だけなのだから、他者への無關心を現世一般のこととする話者の斷定は、恣意的なものと言えよ

何其芳「墓」に見る夢想世界の展開（高屋）

う。ここでも話者は密かに、自分が他者の關心の對象となることを、期待しているのかも知れない。その上で話者は、手紙とそれに挟んだ押し花を保管することで、誰かとの思い出を保持し續けているらしい一人の友人の姿を描寫する。その姿を「あたかも私の寂しさを分かち、優しく穏やかな彼の記憶を示しているかのようにだった」（二二頁）と評していることから、他者への關心を繼續することを、忘却された自分自身ひいては「獨り言」で成立する現實世界への、一種の救済と見做していることが伺える。他の例として散文「夢後」（三四年六月）に於いて、「私達がただ自分のことだけを考える時、世界はついに狭小なものとなってしまった」（二七頁）と、相互に關心を寄せない現實世界を恨む言葉が見られる。再び「獨語」の分析に戻る。他者による現實世界の救済、即ち自分への關心を期待するばかりではなく、話者は自らを、人類に對して積極的に關心を抱く主體としても、位置付けている。

私はかつて自ら忖度するに、あの人類に濫もりを與えるものが、私には過度に缺けているのでなければ、滿ち溢れているのだ。（中略）インドの王子は遊歴へと出かけ、生老病死を目にして、ついには自他を得度せんとする大願を抱いた。私も一本の、その下でしばしの思索を

する、菩提樹の陰を考えた。私が思索しようとするのは、「インドの王子とは」別の題目なのだが。(二三頁)

「獨り言」に閉ざされた現實世界の中で、尙且つ人類への愛に滿ち溢れたインドの王子、即ち釋迦という主體位置が括弧に括られたまま、話者は現世一般について超越的な記述を始める。勿論、「獨語」末尾が明かすように、この釋迦に準えた超越的な記述自體、現實世界では話者の「獨り言」に過ぎない。夢想世界が對象化されて、現實世界へと開く契機を見出した次の瞬間、その現實世界を超越的に俯瞰する、次の夢想世界が始まる。そしてすぐさま、その夢想世界も「獨り言」でしかない現實世界へと、再び回歸する。

こうした現實世界と夢想世界との圓環的な回歸運動こそ、三三年以降の詩作に認められる顯著な特徴である。典型例としては、「古城」(三四年四月)が擧げられよう。「黄色い槐の花と感傷的な涙」と表現された失愛の後、<sup>(6)</sup>夢想世界に赴いた詩の話者は、「驚き脅えた夢の扉が遙か遠くで閉まるのを聞き」、再び現實世界に立ち戻る。そして「荒涼とした」現實世界を逃れようと、「高い樓閣」に登って城壁の外を眺め、僻遠の地へと夢想によつて馳せる。しかし話者は、その夢想世界にある僻遠の景物までもが、孤獨な絶叫をあげているの

を目にする。誰もが互いに關心を持たない、孤獨に閉ざされた世界をそこにも見出した話者は、「世界がこのように狭く小さいことを悲しみ」、再び城壁の内側の現實世界に戻ってくる。他の詩に於いても、荒涼とした孤獨な夢想世界から現實世界に回歸した後、その夢想世界で見た個々の存在が如何に孤獨に閉ざされていて、世界がいかに狭く小さなものであるか慨嘆する、という設定が見られる。

假にここで論じた詩や散文の話者が、書き手の何其芳その人だと見做し得るならば、夢想世界内部での記述の行き詰まりから始まった、何其芳による三三年以降の言語實踐は、再び新たな夢想世界へと歸着する。だがその言語實踐が、所詮「獨り言」に過ぎないのであれば、他者、即ち読み手と言語によつて繋がるうとする欲望を、書き手は豫め放棄していることになるだろう。そして勿論、書き手としての何其芳が眞に切望すべきだったのは、一面識もない読み手が何處からか、密かに自分に想いを寄せている、というただ一つの夢想でしかあり得なかつたのではあるが。

#### 注

本稿の考察、及び拙譯による引用は、散文については『畫夢錄』(民國二六年五月三版、文化生活出版社)の影印本に、詩に

ついでには『何其芳詩全編』（一九九五年二月、浙江文藝出版社）に基づき、散文の引用頁は本文中の括弧に漢數字で記載した。

(1) 易明善等編『何其芳研究專集（中國當代文學研究資料叢書）』（一九八六年三月、四川文藝出版社）所收の「何其芳著作系年」に基づく。尙、渡邊新一氏が「何其芳『畫夢錄』を讀む」（一九八一年三月、『中央大學論集』二號）に於いて、第一輯所收の「詩の創作上の行きづまり」が、散文ジャンルへの轉換が圖られた原因の一つではないか、と推測しておられる。

(2) 紙幅の関係で言及しなかったが、散文「夢後」（三四年六月）に於いても、この二つの夢想とその失効を巡る記述が見られる。

(3) 王水照氏の「深切的懷念」（中國社會科學院文學研究所編『衷心感謝他——紀念何其芳同志逝世十周年』一九八七年六月、上海文藝出版社）によれば、後年の何其芳は三一年に體驗した自身の失愛を、女から愛されていたのに、その愛に氣付かないままに終わってしまった愛とし、「歡樂」詩（三二年）はその體驗を基に書いたと回想している。實體験が何其芳が回想する通りのものであったとは考えにくいが、何其芳が後年に至るまで、失愛に關する夢想世界を意識的、或いは無意識的に保持し續けていたことが確認できよう。

(4) 何其芳は自身の失愛について、「僕は葦である。どんなひときぎりの奇妙な風が、僕を挑發していたのか知らずに、つ

何其芳「墓」に見る夢想世界の展開（高屋）

い聲を出してしまった。」（『燕泥集』後話）と不可解な隱喩で述べているが、これについても「幸福な王子」が下敷きになっていると考えられるかも知れない。「幸福な王子」では、燕は王子の元を訪れる以前に、一本の葦に戀をしている。だが葦が燕の言葉に應答せず、風とはかりふざけて愛嬌をふりまいてることが一つの原因となって、燕は葦の元を去ってまう、という設定になっている。何其芳の回想には明示されていないものの、葦を置き去りにして飛び去った燕の存在が、意識されていたことになるだろう。

(5) 題材論としては、「花環」詩（三二年）が散文「墓」と同範疇に括られることについては、先行研究でもつとに指摘されている。本稿は題材論の視座からの分析ではなく、ある題材がどのような語られるか、という形式論の視座から検討しているため、「花環」詩との關連性については特に言及しない。本稿の立場では、夭折した少女のイノセンスを稱揚する「花環」詩が、三二年詩の形式から逸脱したものではないことを指摘しておく。

(6) 小説「遲暮の花」（三六年）に於いては、「黄色い花」というのは、女から贈られたことよって、男がその女に戀愛感情を覺えた契機となっている。「黄色い花」の戀愛に於ける具體的機能が、他の作品に於いても展開されているわけではないが、漠然とした戀愛、或いは失愛のイメージとして機能している、と考えられる。